大槌

岩手県 otsuchi

まちづくりのプロとして第一線で支援したい

多くの犠牲を出した岩手県大槌町でも町内2地区（約100戸）で災害公営住宅の建設事業が始動した。奮闘する2人を訪ねた。

わき上がるプロの使命感

「これはとんでもないことになった」。更地同然の町に初めて足を踏み込んだとき、渡邊正彦はあぜんとしてつぶやいた。テレビの報道で見ていた光景とははるかに異なる現実が広がっていた。同時に、〝まちづくりのプロ〟としての熱い思いがわき上がった。

「震災後の4月から、URのスタッフが、岩手県の沿岸市町村に派遣されていることは知っていました。自分も何かできるはずだ、やらねばならないという気持ちが募ってきたのです」

渡邊はこれまで担当した事業でも、関係者とひざ詰めで交渉する経験を数多く積んできた。いわば第一線の現場のベテランだ。

阪神・淡路大震災の時には、建物の応急危険度判定を行った経験もある。しかし、その時より、さらに強い思いに突き動かされた。

関西勤務だった北村孝一にも、支援に参加してほしいとの要請が寄せられた。「これまで培ってきた経験が役に立つなら」と決心した。

北村もまた、阪神・淡路大震災の支援を経験している。関西を中心にニュータウン開発を手がけてきたベテランだ。

槌音が響き これからが本番

昨年7月に赴任した2人は、まず、浸水した地域を歩き回り、地図に色分けしながら、どこまで水が上がってきたかを確認した。地味で時間がかかる仕事だが、復興には欠かせない重要な資料となる。

さまざまな仕事に追われる中、自分たちで気になる場所があれば足を向け、いつでも助言できるように日頃からアンテナを張り巡らせた。「どんな疑問や質問にも対応できる臨機応変さこそが、プロの仕事」だと考えていたからだ。

現在、大槌町の仮庁舎には、全国からの支援スタッフが集まっており、その数も数十名を超える。4月11日にはURによる災害公営住宅建設事業も始動した。

「現在、地元の意思確認を行う段階に入っています。ようやく復興へ向けての具体的な一歩を踏み出しました」

被害の大きかった赤浜、町方、吉里吉里など海岸線エリアの地権者との交渉がスタート。役場スタッフを中心とした根気強い話し合いが進められている。そして、ボーリング、測量調査など、現場での槌音も響き始めた。これからが本番だ。

「〝まちづくりのプロ〟として、第一線で思いきり力を発揮したい」。渡邊はそう胸を張った。

渡邊正彦 わたなべ まさひこ（右）
北村孝一 きらむら こういち（左）
ともに、2011年7月から大槌町の復興計画策定支援を担当。

震災から一年。献花台が備え付けられた旧大槌町役場

Close Up 地元の個性を生かし、「食」から復興を

おらが大槌 復興食堂　岩間美和さん

「被災して仮設住宅で暮らす方も、ここに来れば誰かに会える。そんな人と人とのふれあいの場なんです」と語るのは、「おらが大槌 復興食堂」店長の岩間美和さん。震災後に結成された観光・産業の再建を「目指す一般社団法人「おらが大槌夢広場」が開設した食堂で、岩間さんもそのメンバーの一人だ。以前は、水産加工会社に勤務していたが建物は流失。経験を生かし、食の面からの再興を目指している。

「復興食堂」の人気メニュー、ご飯の上に鮭の身とイクラを乗せた「おらが丼」（800円）もかつての大槌町の名産をアレンジしたもの。これは地元の料理人と共に開発した。

11月のオープンから半年。「目標は“食と地域”の絆づくり。確実に前進していますよ」と手応えを語る。地元の個性を生かし、力を合わせ復興へ向かう、大槌町の底力が垣間見えた。

店長の岩間美和さん

●おらが大槌 復興食堂
岩手県上閉伊郡大槌町上町6-3
TEL.0193-55-5120
営業時間／11:00〜15:00（昼）、17:00〜21:00（夜）
定休日／月曜
http://oragaotsuchi.web.fc2.com/